

「島が島なら、駅も駅だな！」
 と言われたい。

京阪電車中之島線 駅デザイン
 (中之島駅、渡辺橋駅、大江橋駅、なにわ橋駅)

全体監修 (建築)
 中之島高速鉄道株式会社
 京阪電気鉄道株式会社
 株式会社安井建築設計事務所

基本設計 (建築)
 京阪電気鉄道株式会社
 株式会社安井建築設計事務所

実施設計
 中之島駅 : 株式会社内藤建築事務所
 渡辺橋駅 : 共同設計株式会社
 大江橋駅 : 株式会社大建設
 なにわ橋駅 : 株式会社梓設計、安藤忠雄建築研究所 (出入口他)

中之島とのシンクロ

中之島は、とにかく愛着を持って語られることが多い。そしてなぜか中之島のことを悪く言う人はほとんどいない。

中之島の魅力は何かと考えた時、筆頭に挙がるのが水辺や緑といった自然環境だろう。都心のど真ん中でありながら、ちょっとしたリゾート感が味わえる。この心地良さは、あらゆる層に満ちて評価されている。それに加え、とりわけこだわり志向の人たちに支持されているのが、街的な魅力。趣のある建築物、アートな出来事、好奇心をくすぐる街の空気感など。キタやミナミとは明らかに違うちょっとスローで優雅なスタイルが、大阪の中で際立った個性をつくっている。

この愛される島を味方につけ、イメージをうまくシンクロさせる。それが駅をデザインする上で最初に考えたことだった。

沿線として浮かび上がる島

中之島は実際本当に水に囲まれた島なのだが、あまりそれを意識することはない。その理由は、島へのアクセスが便利すぎることにある。面積約50haの島にかかる橋が全部で24本、島の橋密度(※1)は0.48。この数字はおそらく世界屈指の水準となる。これ以外にも地下で地下鉄が3本、上空では高速道路が3カ所も横断。これではさすがに「島に渡る」という、なんとなくありがたい気持ちも薄れて当然だろう。

そこへさらに中之島線が通るとなると、ますます「島」感がなくなる、と思いきや、そうではない。前述の交通基盤はすべて南北方向に走っており、東西に細長い中之島を一時で通過してしまう。ところが中之島線は、どこまで行っても中之島。沿線がそのまま島なのだ。

さらに特筆すべきは、島内でも抜群の一等地にあたる川沿いを通っていること。駅はまるで船着場。たとえば川の付近にいて、どっちが島だっけな?と迷った時、中之島線の駅を探せばいい。そっちが島ですよ。

意図したのは、4つの駅を共通のわかりやすい記号にすること。駅があちこちに現れ、そこが島の中であることを知らせてくれる。そして街に埋もれていた「島」という領域は再び、くっきりと浮かび上がる。

※1 島の面積1haあたりの橋の数(たった今筆者が考案した指標)

駅に時間を取り戻そう

駅に時間はあるのか?というちょっと哲学的な問題について考えてみた。ここで言う時間とは、もちろん運行ダイヤのことではない。ロマンチストな人なら、駅という言葉で旅立ちや別れなど、そこでの悲喜こもごもを連想するだろう。そんな映画のワンシーンのような情景は今どき稀かもしれない。ましてそれが都心の駅なら、感傷にひたる間もなく次々と電車がやってくる。それでも、駅に「時間」を取り戻したい。

話が飛ぶようだが、今度は地下駅について考えてみる。一般的に地下駅は空間に一切の無駄がなく、なるべく短いルートで電車に乗れるよう計画されている。地下工事のコストを考えればそれはもったもなしだが、そのために多くの地下駅は誰もが足早に通る場所になっている。

ところが、中之島線はその例にあてはまらない。理由は、地下駅でありながら空間に余裕を持っていること。島を渡る時に大川の下を越え、島に渡ってから2本の地下鉄の下を越えているため、その分駅の空間が深く(高く)なっている。

空間の余裕は、豊かな改札外コンコースをつくることを可能にする。改札の内側に機能的につくれるのに対し、改札外は比較的自由度が高い。大きな吹抜けを設けたり、店舗の区画を並べたり。また切符を買わなくても入れるため、ここを街の一部ととらえることができる。街の持つ空気感をそのまま地下に。「時間」を取り戻す鍵はこの改札外コンコースにある。

島ウォーカーの皆さんに朗報

ところで、中之島線の改札外コンコースが4駅あわせてどれぐらいの長さになるかご存知だろうか。答えは約800m。これに対して島の東西の長さが約3,300mなので、島のコンコース率(※2)は実に24%という驚異的なものとなる。つまり、コンコースは島の主要なストリートなのだ。

駅は4つに分かれとるやないかい!というツツコミには、微笑みながらこう答えたい。4つのコンコースは実際につながっている。前述の通り中之島線は川沿いに位置しているが、その地上部では魅力あるプロムナードが島のほぼ全周を結んでいる。コンコースはここから分岐するもう一つの道として、島の歩行者ネットワークに組み込まれる。一軒の家に例えれば、地上の道が自然にのびのびの庭で、地下の道は居心地の良いリビング。その時の気分と天気どちらを歩くか決めればいい。

また街を歩く上で、「一駅」という距離の単位はとても手頃なものさしになる。ちょっと一駅、がんばってもう一駅。きっと今までよりも島が小さく、身近に感じられるはず。単に電車に乗るだけでなく、駅内や駅間をゆっくりと巡るために存在する駅などそうはないだろう。

※2 島の長さに対する改札外コンコースの合計長さの割合(たった今筆者が考案した指標)

アグレッシブにくつろぐ

この800mにわたる地下のストリート、つまり4つの駅の改札外コンコースをどうデザインするか。結論は見ての通り木という素材を前面に押し出したものだが、重要なのはその理由。以下3本立てでお送りします。

第1に、理屈抜きにほっとすること。毎日でも歩きたいと思う道には、何かリラックスできる要素がある。地上の道であればそれは並木であったり、大きな空だたりするのだが、地下の道にはそのいずれもない。だからここでは見て疲れるような過剰なデザインは避け、木の素材が持つ風合いで空間を包み込むことにした。

第2に、無垢の木は時間の経過とともに魅力が増していくこと。駅は半永久的に存続する施設なので、いつまでも愛着を持って利用してもらいたい。目指すのは、島の大先輩である中之島公会堂のような存在。100年後、地下の建築物が街のシンボルになっていたら、それはすごいことだと思う。

第3に、木が今の時代に見直されている素材であること。それは単にスローライフスタイルに合うというだけではない。近年の技術革新によって不燃化が可能になり、新たな活用の可能性が広がっている。地下の駅でここまで大々的に木を使用するのは、国内はもちろん世界でも初めてのだろう。ほっとするくつろぎ感の陰には、技術面でのアグレッシブな挑戦がある。

潜りがいのある世界

潜って最高!と友人のダイバーは言う。潜っていくほどに風景が変わり、魚の種類も深さによってさまざまだ。もちろんこれは海の話であり、駅に魚がいるわけではない。でも地下に潜っていくにつれ異なる世界が現れたら、そこには共通するおもしろさがあるだろう。あらずじはこんな感じ。

島のあちこちに現れる木の出入口。中之島には意外なほど木の建築物が少ないので、街でちょっと気になる存在になると思う。ここから中に降りていくと、壁から天井まで木に包まれた改札外コンコースにたどりつく。木が気になって、気がつけば木の中にいる。

改札外コンコースを街の一部ととらえると、改札を越えてからが本来の駅ということになる。ここで木の空間から一転して金属の空間に変わる。また各駅に一つしかない改札は、駅の中で最も広くて明るい空間になっている。街歩きから電車待ちへのスイッチは、わかりやすく、劇的に。

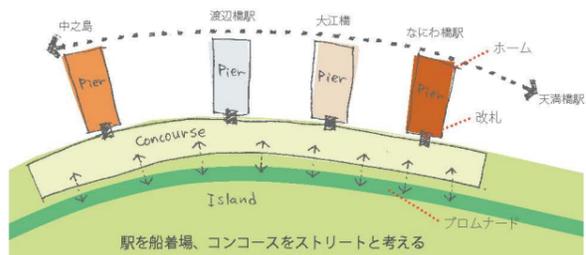
改札からさらに下、駅の一番深いところにはホームがある。この壁にはそれぞれの街のテイストに合わせて、各駅で違う素材を使っている。電車を待つ間、また電車で駅に着く時に見える景色は、さりげなく街とつながっている。

地下であることは制約を伴うばかりではない。閉じた空間だからこそ、その中で徹底して世界をつくることのできる。

そして駅ができた

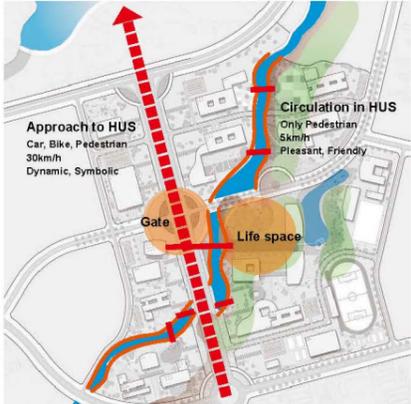
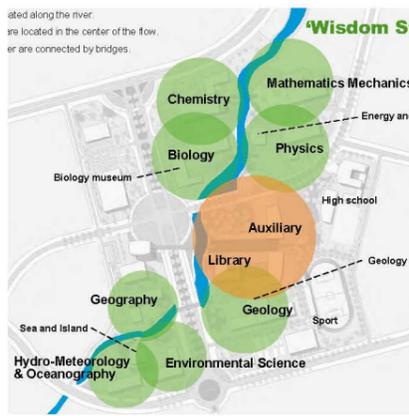
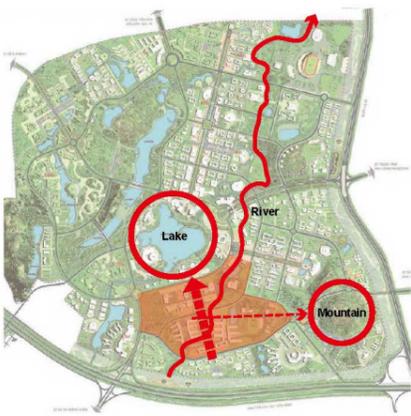
こんなことを考えながら駅をデザインし、それが今実際に形となって中之島に現れた。鉄道が新しく出来るというのは想像していたよりも大事件で、テレビのニュースから飲み話まで、世の中のあちこちでいるんな(おおむね好意的な)声を聞いた。

語弊があるかもしれないが、仮にもし中之島のことを嫌いな人がいたら、その人からは「島が島なら、駅も駅だな!」と言われたい。それはきっと、本質的なところまで島と駅とが結びついている証拠だろう。そう考えれば、これ以上の要め言葉はない。何せ中之島線の駅は、この島にあるたった1つ、いやたった4つの駅なのだから。





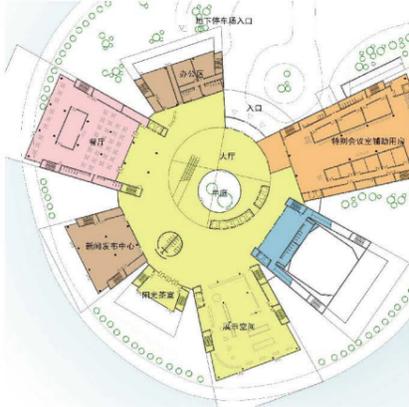
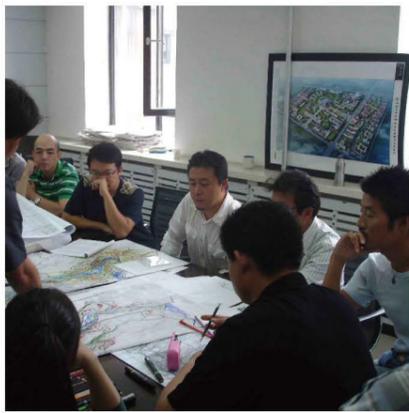
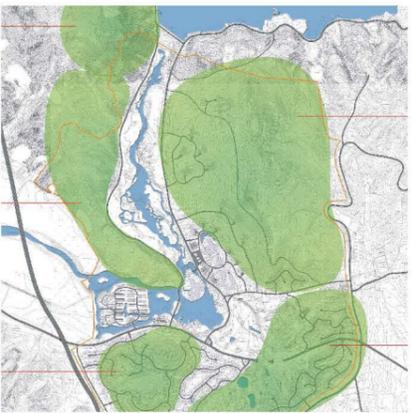
昔も今もこれからも、新たな知恵は川のほとりから生まれる。



**ハノイ自然科学大学
新キャンパスマスタープラン**
位置/ハノイ市 Hoa Lac ベトナム国家大学地区
区域面積/65ha
合併により拡大された首都ハノイの郊外で地区面積1000haに及ぶベトナム国家大学移転計画がある。ハノイ自然科学大学はその第1号プロジェクトとして推進されているもので、7つの学部とセンター施設、研究センター等で構成される。マスタープランは建設大臣に承認され、現在建設中。
プロジェクトチームの体制
安井建築設計事務所 (プロジェクトリーダー)
Vietnam National Construction Consultant Corporation



山にはそれぞれ個性があり、その個性にふさわしい役割がある。



**第12回全国体育大会
接待中心地区マスタープラン**

位置 / 遼寧省瀋陽市 棋盤山国際風景区
区域面積 / 610ha

全国体育大会は4年ごとに開催される中国国内最大のスポーツイベント。開催期間中政府首脳や各界の貴賓が滞在する接待中心地区は、迎賓館、会議場、別荘・ホテル、各種スポーツ施設などで構成される。6カ国の建築家によるコンペで最優秀賞を獲得。

プロジェクトチームの体制
安井建築設計事務所（プロジェクトリーダー）
中国建築東北設計研究院有限公司
大連理工大学土木建築設計院